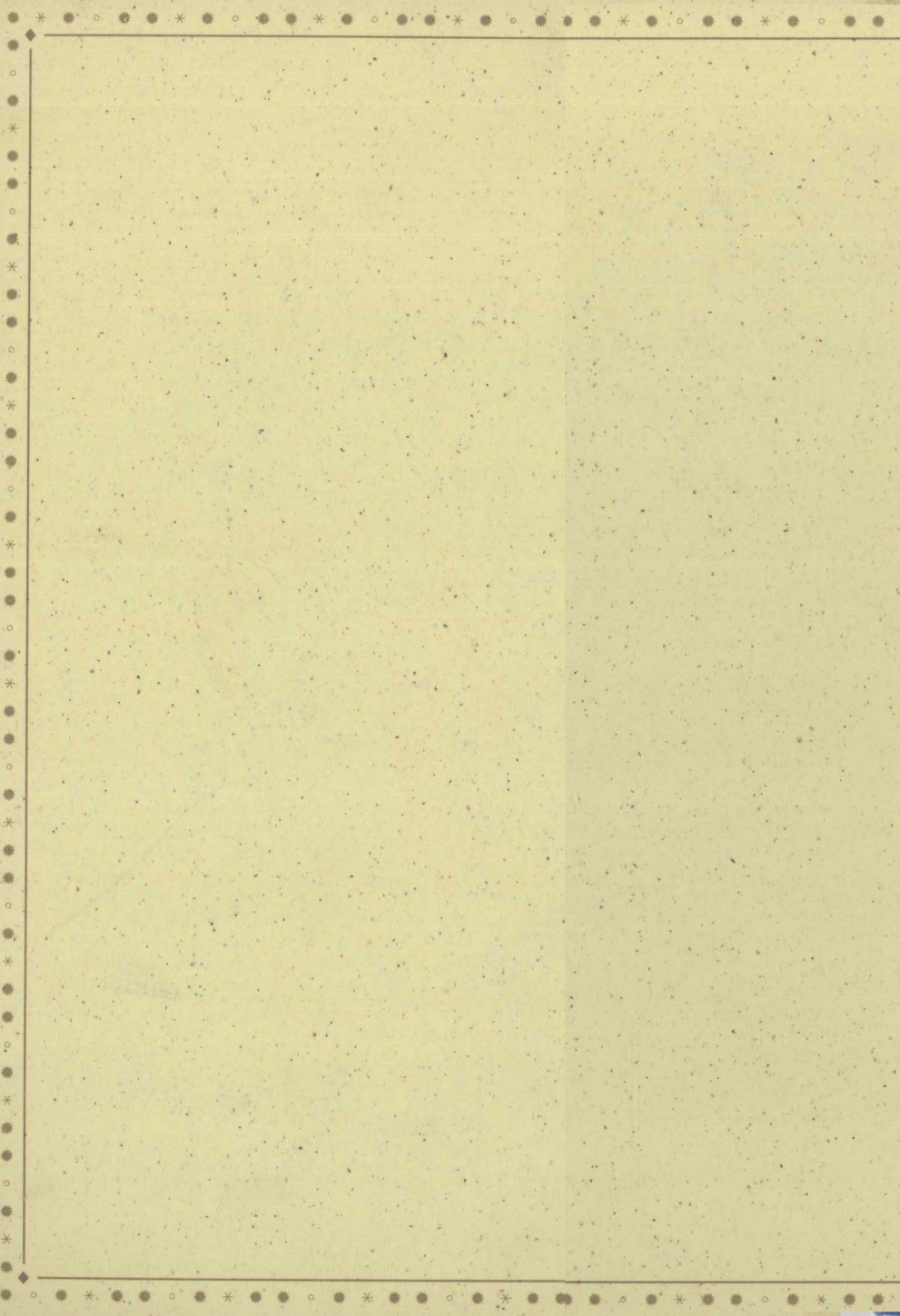




ターン

——三番目に好き

氷室冴子

初出誌 **non・no**(1988. 6. 20-1990. 3. 20)連載。
刊行にあたり、大幅に加筆訂正いたしました。

ターン——三番目に好き

一九九一年一月二五日 第一刷発行
一九九三年六月三〇日 第五刷発行

著者||氷室冴子
いむろ さえこ

発行者||若菜正

発行所||株式会社集英社

郵便番号||一〇一・五〇 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

電話 ||三(三三三〇) 六一〇〇||編集部 (三三三〇) 六三九三||販売部
(三三三〇) 六〇八〇||制作部

印刷所||中央精版印刷株式会社

検印廃止 ISBN4-08-772824-2 C0093

© Saeko Himuro, 1991 Printed in Japan

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複製・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

CONTENTS

第一章	流されたいの	5
第二章	伏兵がいつばい	52
第三章	ふりだしに戻って	101
第四章	ふたりでビールを	152
第五章	再会はちょっとビター	185
第六章	ターン——三番目に好き	211

A 装
D 画
月 わ
乃 た
跳 せ
生 い
ぞ
う

ターン——三番目に好き

第一章 流されたいの

I

名前をよばれたような気がして、

「え？ なにかいった？」

キッチンでお粥をつくっていた鞠子は、ふり返った。

六畳間のベッドに寝ていた祐一が、体半分だけ起こして、こっちを見ている。目がうつすらと熱っぽく潤んでいて、なかなかイロッぽい。

パジャマの胸のあたりがはだけていて、そんなもの、弟のミッルので見飽きてるはずなのだが、さすがに、他人の男のパジャマ姿というのは目のやり場に困り、鞠子はどぎまぎしてしまった。

「なあに。起きてていいの。熱があるんでしょ」



わざと、つつけんだんな口ぶりになる。

「鞠ちゃんがくる前に、ひと眠りしたからさ。熱はだいぶ下がってるはずだよ。この感じだと、七度くらいかな」

祐一は額を手で押さえて、くぐもった声でつぶやいた。

その口調がまた、もたもたと子どもっぽいの。

まだ微熱があるせいかな、ひどくけだるそうで、いたいけな感じである。

（病氣してるひとり暮らしの男を見舞うと、三割がた、情がうつる）

というのは当たってるかもしれないなと、鞠子はしみじみ感心した。いいえて妙、という感じ。

三割がた云々といったのは、同僚のミキである。

鞠子は母校の女子大の事務局に勤めている。大学の事務員なんてのはほとんど縁故採用で、給料の安ささえ我慢すれば、そこそこ居心地がいい。職員の入替えはめったになくて、見渡すかぎり中年と老人ばかりがうろついている。

今年、図書館の司書に採用された鳥居ミキは、

「これじゃ中年ホームよ。二十代はあたしと鞠ちゃんだけなのよ。信じられない職場よーっ」とブリブリ怒りながら、なにかという、ひとつ先輩の鞠子になついてくる。

ミキは永福町に住んでいて、調布に住んでいる鞠子と同じ路線だから、帰りは自然といっしょになり、ときどき途中下車して、鞠子の部屋で夕飯を食べていくこともある。とくに鍋物や焼肉

が食べたくなると、鞠子の部屋に押しかけてくる。

今日も、大学の学生食堂で同じテーブルになったときに、

「鞠ちゃん、今日、部屋によらしてよ。なんか、しゃぶしゃぶ食べたくなった」といった。

「うーん。パス。ちょっと、知り合いがカゼで寝こんだっていうんで、お見舞いに行くからさ」
さらりと言ったつもりだったのに、さすが女同士のカンというのか、ピンときたらしい。

「ふん。オトコか」

さりげなくいいながらも、目尻のあたりにピッと緊張が走り、

「病氣してる男のどこ見舞いにくくと、三割がた情がうつるわよ、鞠ちゃん。情がうつって、カスつかむなよ」

にこりともせず、ぼそりといった。

そのときは、そんなもんかなと思ったただだったが、こうして風邪の祐一を目のあたりにすると、かなり説得力があるような気がする。

確かに祐一はいつものより、かなり好もしく見えるのだ。

いつもよりといっても、祐一には今日を含めて、まだ三回しか、会ったことがない。つい二ヵ月ほどまえに見合いした相手である。

「よし、できたぞ」



土鍋が噴いてきたので、鞆子はガスの火をとめた。

鍋つかみがないので、フキンで土鍋をつかんでお盆に移す。

おかずは、スーパードで買ってきたゴマ豆腐に梅ぼしに、煮豆くらいのものだが、お惣菜を買ってきただけヒットであろう。

DKは六畳ほどで、いちおう、ふたり用のダイニングテーブルがあるにはあるけれど、上にはトースターやコーヒーマーカーが雑然と置かれている。テーブルというより、物置台である。

しょうがないので、ベッドのある六畳間のほうに、お盆をもつてゆく。

祐一はのろのろと上半身をおこして、お粥をひとくち啜った。そのとたん、にんまりと笑って、「うまい。ハラにしみる感じがする」

心底、嬉しそうにいった。

朝からなんにも食べてないというのは、嘘ではないらしい。

「こんな世話かけて、わりいな」

「いいわよ、そんなの。ずうずうしく押しかけてくる、あたしもあたしだから」

「ずうずうしくないよ。ほんと、助かる」

祐一はありがたそうにいつて、はふはふとお粥を啜っている。

鼻の頭に汗をかきながら、ずるずる音をたてて啜るところが、

（ふーん。けっこう遠慮のない性格なんだ）

と感心させられる。普通なら、すこしはカッコつけそうなものだが、やっぱり風邪なんかひい

ていると、カッコよりお粥、なのかもしれない。

「お粥もおいしいし。鞠ちゃん、わりと料理上手なんだな」

「やだなー。お粥って、お料理？」

「料理だろ、やつぱり。うまくつくれるヒト、少ないんじゃない？」

「そうかな。あ、お茶いれるわ」

ふと思いついて立ちあがると、

「お茶っぱ、戸棚ん中に入ってるから」

すかさず声がかかったので、うん、と答える。

キッチンのほうに戻りながら、

（うーむ。これじゃ、あまりに新婚だ）

なにか、すっかりホノボノした雰囲気なのが、われながら信じられない。

見合いたふたりの仲が、なかなか進展していかないのをヤキモキしている母の佳江や、仲人マ

アの桑田夫人が、こういう図を見たら、すっかり、その気になってしまうのではないだろうか。

II

祐一とのお見合いがもちこまれたのは、今を去ること二ヵ月ほど前の三月半ばだった。



勤め先の母校の女子大は春休みで、鞠子は連日、残業だった。

春休み中の大学は、新入生の名簿づくりや連日の教授会のお世話で、目がまわるほど忙しいのだ。

そんな事情を知らない母の佳江は、しきりと電話をかけてきて、

「春休みなのに、どうして大学が休みじゃないのよ。お給料やすい分、休みがたくさんあるって話だったじゃないの。会って、いろいろ話したいこともあるのに、なにが残業よ。あんたってほんと、要領悪いんだから」

まるで残業してるのは、鞠子の要領が悪いのだといわんばかりに文句をいう。

専業主婦二十年のベテラン技というのか、およそ人の都合ってものを考えないヒトなのだ。

仕事を説明するのもめんどろでほうっておいたが、ある日、夜も七時をまわってアパートに帰ってみたら、佳江がきていた。

「あんた、遅いわねえ。あたし、五時からきてんのよ」

持参の小僧寿司をつまみつつ、ゆうゆうとテレビを見つつ、文句をいうところが、なんというか、いかにも母親である。

「お母さん、カギどうしたのよ」

「お向かいの大家さんにご挨拶にいったって、開けてもらったのよ」

佳江はお茶をすすりながら、平然という。

「大家さん、ほめてたわよ。最近の若い娘さんみたいに生活も乱れてないし、やっぱり大学にお

勤めの方は違うって。お給料安いし、ろくな職場じゃないと思ってたけど、こうなると、けっこうアナ場だったわね、大学って。身元がしっかりしてるって保証みたいなもんだもんね」

しきりと褒めちぎる。

佳江が、そんなふうに勤め先の母校をほめたのは初めてで、鞠子はびっくりした。

鞠子の母校は、できて十年くらいの新設大学で、英文学科と国文学科、児童文学科だけの典型的な私立の女子大である。短大部もあって、そっちは生活科だの栄養科だのがあるが、大学も短大も、これといって特徴があるわけではない。

唯一の自慢は、当時の一流建築家に設計を頼んだとかいうクラブハウスだが、鞠子から見ると、軽井沢の結婚式用教会かラブホテルかといったふうで、それも何年か前、その建築家が脱税でマスコミに騒がれてから、すっかり色褪せてしまった。そういう女子大である。

学生の半分は、地方出の金持ち娘で、

「どんな大学でも、とりあえず東京に出られればいい」

という理由で入ってきたようなコである。

鞠子がそこに入ったのは、第一、二、三志望の有名私立に総コケして、しかし浪人はダメだというので、しぶしぶ入学しただけだから、入ってみて、びっくり仰天した。

「短大なら二年間しか遊べないけど、四大なら、四年間遊べるし」

というコばかりだったのだ。

おかげで四年生になっても、学内は就職活動の雰囲気、ぜんぜん盛りあがらない。



なにしろ地方の名士の親たちが、娘を地元に戻ってこさせるために、車や、ひとり暮らしのマンションを用意して、

「就職なんて、こっちに戻ってきてから、ゆっくり捜せばいいんだから。ともかく帰ってきて、親を安心させてちょうだい」

と泣き落としをかけてくるような環境なのだ。

娘たちのほうでも、そういう親の足元をみて、ポルシェだのゴルフだの外車をねだるような連中ばかりだから、どっちもどっちである。

夏休み前の話題といえば、卒業旅行第一弾の海外旅行をどこにするかとか、ボーイフレンドがどこの内定をとったとかいう話ばかり。

四年かかって、そんな環境にすっかり慣らされてしまったせいも、鞠子も就職活動に今ひとつノリきれず、夏休みが終わったあたりから、ようやく、

（この大学を卒業しても、せいぜいが事業所あたりの事務なんだ。そっか、一流企業のOLになるには、女もそれなりに一流大学に入らなきゃならなかったのか！）

シビアな現実が見えてきた。そのあたり、鞠子もおめでたかったといえる。

高校時代の友人たちは、みんなイトコの内定をつかみどりで、そういう情報がまた、ポンポン耳にはいつてくる。

四年間、ろくに電話もなかった連中にかぎって、

「鞠子オ、あたし、本命の〇〇物産の内定、とっちゃった。ラッキー！ 大学で花が咲かなかっ

たぶん、OL生活にかけるよ。あんた、ドコだった？ なにか情報ない？」

息はずませて、電話をかけてくる。

そんな電話をちゃっかり立ち聞きしていた佳江が、にわかにヒスリだした。

「高い学費払ったあげくに、学生の就職のめんどろもみないって、二流もいいとこだわ。おまえ、どうしてもっと、まともな大学に入ってなかったのよ」

ずけずけという。

そもそも四年前、浪人はダメだから、滑りだめで受けた大学に入れと主張したのは、ほかならぬ佳江なのだ。それを、すっかり忘れている。

なぜ浪人がダメかというと、二つ年下の秀才の弟ミツルの受験のためだった。

鞠子が浪人すると、連続して受験生をかかえることになって、母親の負担が大きすぎる。ここは国立の医学部をめざしているミツルに、家庭の全精力を集中させるためにも、鞠子にはさっさと納まる場所に、納まってもらいたいとキツバリだったのである。

「いまだとき、そんな時代錯誤な……」

と友達にもいわれたが、しょうがなかった。

ともかく弟のミツルが、実の弟とは思えないデキた秀才で、小さいころから、母の佳江の期待を一身になつてきた家庭だから、ミツルのため……というセリフが出てくると、家族全員がミョーに納得してしまうのである。

十数年前、ミツルの有名私立小学校の受験のために佳江がかかりきりになり、公立の小学一年



生だった鞠子のほうは、毎日、オヤツにインスタントラーメンを食べていた頃から、そういう役回りであったのだ。

なのに、いわばミツルのために浪人もできずに、なきなき入った滑り止め大学のことを、今さら、

「あんな二流大学」

と罵られては、鞠子としても気分が悪い。たしかに一流とは思えないが、なにはともあれ母校なのだ。

思えば、大学四年生の秋は、たいへんだった。

夏休みもすぎた九月あたりから、鞠子は家に帰るのがおっくうでたまらなかった。

ドアをあけるなり、佳江がとび出してきて、

「どうだった？ 今日、どこ受けてきたの。内定、もらえそう？」

鼻息もあらく、問い詰めてくる。

次々と電話をかけてくる元クラスメートのせいで、すっかり受験生の母の気分に戻り、好戦的になっているのであった。

「お母さん、教授の自宅まわりをしようかしら。就職口、お願いしますって」

などと目を血走らせて、いう。

新設大学にケのはえたような女子大では、教授たちに、期待するほどの企業人脈など、あるはずがないのに、それがわかってない。